



2007年9月26日

報道関係者各位

慶應義塾

第12回慶應医学賞受賞者決定 熊本大学教授満屋裕明博士、オレゴン大学教授 Brian J. Druker 博士

慶應義塾（塾長 安西祐一郎）は、1996年から医学・生命科学の領域において顕著かつ創造的な業績を挙げた研究者を「慶應医学賞」として顕彰してきました。過去には、本賞受賞者からノーベル生理学・医学賞受賞を2名輩出するなど我が国の大学において他に類を見ない顕彰制度です。第12回目を迎えた今年度の慶應医学賞受賞者が満屋 裕明博士（熊本大学教授）、Brian J. Druker 博士（オレゴン保健科学大学教授）の2名に決定いたしました。

1. 第12回慶應医学賞受賞者の紹介（添付資料2をご参照ください）

満屋 裕明博士（熊本大学教授）

20世紀末に出現したエイズが世界にもたらした恐怖と被害はきわめて甚大であり、世界各国で、いまだに患者数が増加しています。満屋博士は、米国NIH（国立衛生研究所）にて、エイズの原因であるHuman Immunodeficiency Virus (HIV)の逆転写酵素を分子標的とした、世界最初のエイズ治療薬AZT（アジドチミジン）を報告、遂にその臨床開発に成功しました。その後も次々と新規のエイズ治療薬を開発し、満屋博士が発見した最初のエイズ治療薬3剤は今も世界中で使われています。AZTに引き続いて、多くのグループによって開発されたエイズ治療薬を種々に組み合わせた多剤併用療法（HAART療法）が行われるようになって、エイズ患者の予後は格段に向上しています。満屋博士は、エイズ治療薬開発のパイオニアとして、世界的なオピニオンリーダーであり、エイズ医療に多大な貢献をしました。

Brian J. Druker 博士（オレゴン保健科学大学教授）

慢性骨髄性白血病（CML）は、近年まで、時に重篤な副作用を伴う同種造血幹細胞移植以外には有効な治療法がない難治疾患でした。血液内科医であるDruker博士は、CML治療薬として、製薬会社とともに、開発初期から臨床試験まで、CMLの増殖に重要なBcr/Abl融合分子に対するチロシンキナーゼ阻害剤、Imatinib（Gleevec®）の開発に成功しました。

経口投与可能で、副作用が少なく、ほとんどのCML症例に完全緩解導入可能なImatinibの開発は、CMLやGIST（消化管間質腫瘍）など難治がんに対する治療に貢献しただけでなく、がんの生物学研究に基づいて治療薬を開発するという、分子標的薬開発における、具体的かつ画期的な成功例として、今日のがん分子標的治療の潮流を確固たるものにしました。

2. 授賞式および受賞記念シンポジウムの開催（添付資料3をご参照ください）

授賞式ならびに受賞記念講演会を2007年12月4日（火）に、受賞記念シンポジウムを翌5日（水）に本学信濃町キャンパス（医学部）において開催する運びとなっております。

受賞者とのインタビュー、写真をご希望される場合は、下記までお問い合わせ下さいますようお願いいたします。

以上

添付資料：（1）慶應医学賞について

（2）第12回慶應医学賞受賞者（授賞理由・略歴・受賞者からのコメント）

（3）第12回慶應医学賞授賞式・受賞記念講演会・受賞記念シンポジウム（ご案内）

本発表資料のお問い合わせ先

慶應義塾医学振興基金事務室（河合、細川）

TEL: 03-5363-3609

URL: <http://www.ms-fund.keio.ac.jp/prize/index-j.html>

FAX: 03-5363-3610

E-mail: k-msf@adst.keio.ac.jp



慶應医学賞について

慶應義塾医学振興基金設置の経緯

1994年秋に本学医学部の卒業生である坂口光洋氏(1940年卒)から「義塾における医学研究の奨励と創造的発展に貢献するとともに、世界の医学の進歩に寄与する」ことを念願して浄財50億円が寄付されました。これを受けて慶應義塾は、『慶應義塾医学振興基金』を設置し、1995年4月1日より活動を開始いたしました。さらに1999年7月には20億円の追加寄付を得て、総額70億円をもとに(1)慶應医学賞の授与、(2)医学国際交流事業、(3)医学研究奨励事業、(4)医学研究助成事業、(5)坂口光洋記念講座、という基金事業を行っています。

慶應医学賞の目的

世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な研究業績をあげた研究者を顕彰することにより、世界の医学・生命科学の発展に寄与し、ひいては人類の幸福に貢献することを目指します。

賞の審査・選考および概要

世界十数ヶ国の著名な研究者および研究機関から推薦された候補者の中から、学内外の75名の審査員による厳正な審査を経て、受賞者を決定しております。受賞者には、賞状とメダルおよび賞金2,000万円が贈呈されます。授賞式は慶應義塾大学で行い、受賞者による受賞記念講演会等を開催いたします。

歴代の主な受賞者

第1回(1996年)

Stanley B. Prusiner 博士：プリオンの発見とプリオン病の解明(1997年度ノーベル生理学・医学賞受賞)

第7回(2002年)

Barry J. Marshall 博士：ピロリ菌に対する診断、治療法を確立(2005年度ノーベル生理学・医学賞受賞)

第10回(2005年)

藤吉好則博士：極低温高分解能電子顕微鏡開発による膜蛋白質構造生理学の発展

第11回(2006年)

Thomas A. Steitz 博士：リボソームの構造解明及びそれに基づく次世代抗菌薬の開発



第12回慶應医学賞受賞者

満屋 裕明 (みつや ひろあき)

熊本大学大学院医学薬学研究部

血液内科学 教授

1950年8月9日生まれ

授賞理由 「エイズ治療薬の開発」

20世紀末に出現した Acquired Immunodeficiency Syndrome (後天性免疫不全症候群、エイズ)が世界にもたらした恐怖と被害はきわめて甚大であった。満屋裕明博士は、その危険性にもかかわらず、1984年、米国 NIH の Samuel Broder 博士の研究室で、自ら樹立した CD4 陽性ヘルパーT 細胞を用いて、エイズの原因である Human Immunodeficiency Virus (HIV) に対する治療薬の研究・開発を開始、1985年にレトロウイルス逆転写酵素を標的とした世界最初のエイズ治療薬 AZT (アジドチミジン) を報告、遂にその臨床開発に成功した。その後、ddI と ddC を発見・開発し、これらはエイズ治療薬として世界中で臨床使用されている。さらに、最近、難治性エイズに対して、新規プロテアーゼ阻害薬の開発にも成功している。現在、エイズ治療においては満屋博士が開発した薬剤を含めた多剤併用療法(HAART療法)により、患者の予後は格段に向上している。満屋博士は、世界で最初のエイズ治療薬 AZT を開発し、その後もエイズ治療薬開発に関して、世界的なオピニオンリーダーとして活躍しており、その業績は慶應医学賞受賞に相応しい。

略歴

1975年	熊本大学医学部卒業
1980年	熊本大学医学部第二内科助手
1982年	医学博士(熊本大学医学部)
1982年	米国国立癌研究所客員研究員 (Visiting Fellow)
1984年	米国国立癌研究所上級研究員 (Cancer Expert)
1989年	米国国立癌研究所主任研究員 (Senior Investigator)
1991年	米国国立癌研究所、臨床癌プログラム、内科療法部門レトロウイルス感染症部部长
1997年	熊本大学医学部内科学第二講座(現血液内科・膠原病内科)教授
1999年	熊本大学医学部附属病院治験支援センター長(兼任)
2000年	熊本大学医学部附属病院感染免疫診療部長(兼任)
2000年	熊本大学医学部附属病院病院長補佐
2001年	熊本大学医学部附属病院副病院長
2003年	京都大学ウイルス研究所客員教授

受賞者からのコメント

エイズは私がその研究を始めた頃は恐るべき『死の病』でした。しかし、私がこの病気との闘いに治療薬の研究を通して関わって、恐らく何百万人もの HIV 感染者の生活と命をポジティブの方向に変えるのに役に立てたと思いますと、一介の臨床医としてこのように幸せな事はないと感じております。同時に、私が挙げたかもしれない成果は日本と米国、世界の優れたサイエンティストの貢献なしには不可能であったことを忘れてはならないと思っています。そして今回の受賞はこれから更に研究を続けて強化せよとの命と受け止め、この受賞を慎み深く、心から喜びたいと思っております。



第12回慶應医学賞受賞者

Brian J. Druker (ブライアン J. ドラッカー)

Investigator, Howard Hughes Medical Institute

Director, Oregon Health & Science University Cancer Institute

JELD-WEN Chair of Leukemia Research

1955年4月30日生まれ

授賞理由 「慢性骨髄性白血病に対する分子標的薬の開発」

慢性骨髄性白血病(CML)は、フィラデルフィア染色体と呼ばれる染色体転座により生じたBCR/ABL融合遺伝子に起因すると考えられていたが、近年まで、時に致死的で重篤な副作用を伴う同種造血幹細胞移植以外には有効な治療法がない難治疾患であった。Druker博士は、Ablチロシンキナーゼ阻害剤である低分子化合物Imatinib (Gleevec®)をCML治療薬として、製薬企業と共同で開発した。Druker博士は開発初期よりImatinibがCML治療薬になる可能性に気づき、治験による臨床評価の原動力となった。Imatinibは、CMLのみならずGIST(消化管間質腫瘍)など他の腫瘍にも強い抗腫瘍効果を示すことが明らかになっており、難治がん患者のQOLを大きく改善した功績は大きい。近年、抗腫瘍効果の検討から生まれた既存の抗がん剤とは異なり、がん生物学研究から予測された標的に焦点を当てて開発するという分子標的薬の開発が盛んに進められているが、経口服用可能で、副作用が少なく、ほとんどのCML症例に対して完全緩解導入可能なImatinib開発の成功は、今日のがん分子標的治療の潮流を築いた。がん治療薬の新機軸を明確にしたDruker博士の画期的業績は、慶應医学賞授賞に相応しい。

略歴

- 1977年 B.A., University of California, San Diego
- 1981年 M.D., University of California School of Medicine, San Diego
Internship and Residency in Internal Medicine, Barnes Hospital, Washington University School of Medicine
- 1984年 Fellowship in Medical Oncology, Dana-Farber Cancer Institute, Harvard Medical School
- 1987年 Instructor in Medicine, Harvard Medical School
Clinical Associate, Dana-Farber Cancer Institute
Associate Physician, Brigham and Women's Hospital
Medical Director, Nashoba Community Hospital, Oncology Clinic
- 1993年 Staff Physician, University Hospital and Clinics, Oregon Health & Science University (OHSU)
- 1993年 Associate Professor, Department of Medicine, OHSU
- 1993年 Co-Director, Center for Hematologic Malignancies, OHSU Cancer Institute
- 1993年 Joint Appointment, Department of Cell and Developmental Biology, OHSU
- 1993年 Program Leader, Hematologic Malignancies, OHSU Cancer Institute
- 1996年 Joint Appointment, Department of Biochemistry and Molecular Biology, OHSU
- 1996年 Director / Associate Director, OHSU MD/PhD Program
- 2000年 Professor of Medicine, Division of Hematology & Medical Oncology, OHSU
- 2002年 Investigator, Howard Hughes Medical Institute
- 2007年 Director, OHSU Cancer Institute
- 2007年 Interim Chief, Division of Hematology & Medical Oncology: Hematologic Malignancies

受賞者からのコメント

このような名譽ある賞をいただき慶應医学賞審査委員会の皆様に感謝申し上げます。どんな科学者も一人で研究を行うことはできません。研究室および協力者を代表してこの賞を受けたいと思います。特に私の仕事に多大なる信頼を寄せて下さっている患者さんに心より御礼申し上げます。



第12回慶應医学賞
授賞式・受賞記念講演会・受賞記念シンポジウム
(ご案内)

(1) 授賞式・受賞記念講演会

日時：2007年12月4日(火)午後3時～午後5時15分(予定)

会場：慶應義塾大学信濃町キャンパス(医学部)北里記念医学図書館2階 北里講堂

(2) 受賞記念シンポジウム

セッション1 Therapeutic Strategies for Retroviral Diseases

セッション2 Molecular Target Therapy against Cancer

日時：2007年12月5日(水)午前10時～午後4時(予定)

会場：慶應義塾大学信濃町キャンパス(医学部)北里記念医学図書館2階 北里講堂

講演者(予定): Brian Druker (第12回慶應医学賞受賞者)

満屋 裕明 (第12回慶應医学賞受賞者)

松岡 雅雄 (京都大学ウイルス研究所)

下遠野 邦忠 (慶應義塾大学医学部)

中島 元夫 (ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社)

佐谷 秀行 (慶應義塾大学医学部)

光富 徹哉 (愛知県がんセンター研究所、疫学部)

(3) 詳細及び参加申込み

使用言語：12/4(火)日本語・英語(授賞式、受賞記念講演会は同時通訳がつきます)

12/5(水)英語

参加費：無料

詳細および申込方法は、慶應医学賞ホームページをご覧ください。

<http://www.ms-fund.keio.ac.jp/prize/index-j.html>

なお、12月4日の受賞記念講演会は一般の方を対象に、5日の受賞記念シンポジウムは研究者・学生の方を対象に行う予定です。

連絡先： 〒160-8582 東京都新宿区信濃町35

慶應義塾医学振興基金事務室

担当：河合、細川

Tel: (03) 5363-3609

Fax: (03) 5363-3610

E-mail: k-msf@adst.keio.ac.jp